# 外部情報資源の活用と探索への方策と支援

## 蔵書検索、電子ジャーナルへのアクセスをいかに充実させるか

伊藤 民雄（実践女子学園）

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。本日の話は大きく 3 つです。一つは拙著『世界の出版情報調査総覧』、続いて「蔵書検索への外部情報の利用私案と実際の適用例」、最後に「JJRNavi その後、さらに京都大学図書館さんに対して、JJRNavi を含めた電子情報資源利用についてのインタビューを行っていますのでその紹介」を行います。

先ずは、筆者は 2012 年 5 月、『世界の出版情報調査総覧』（日本図書館協会刊）という書籍を出版しましので、その 3 つのコンセプトをご紹介します。

3 つのコンセプト

・書誌出版情報調査ガイド

・書店ガイド

・現地調達ガイド

1 番目のコンセプトは、書誌出版情報調査ガイド。私の前著『インターネットで文献探索』の拡充版と考えて下さい。これについては 1995 年から国立国会図書館等の全国書誌ガイドのようなものが出版されておりません。

2 番目のコンセプトは、現在の書店協会を概観した書店ガイドであること。2004 年、能勢仁先生の『世界の書店をたずねて』（本の学校・郁文塾刊）という本が出ていますが、2009 年の企画当時にはこれを代わるような本は出版されておりません。続編的意味合いを込めたのですが、昨年本家の続編『世界の本屋さん見て歩き』（能勢仁著　出版メディアパル）が出版されてびっくりしました。

3 番目は、個人にとって現地での資料調達ガイドであること。アメリカ等で本を買うハウツーものはあっても、世界レベルでは出ていないと思います。

他を調べても３つのコンセプトを満たすものは出ていないだろう、というわけで、企画を持ち込んだ日本図書館協会さんからゴーサインが出て、出版することになりました。

3 つのコンセプトについて図を交えて詳細に説明しましょうか。コンセプト 1 について、出版流通上で派生する目録、Books in Print であったり、販売所、取次の販売書誌であったり、書店の販売目録であったり、図書館の蔵書目録であったり、古書店の在庫目録であったりと色々ありますが、こういったものを 117 ヶ国分調べております。

コンセプト 2 の「書店ガイド」については、馴染みの薄い、中欧、東欧、中東、中南米、アフリカの書店チェーン（専門書店ではなく、書店チェーン）を明らかにしました。ドイツの二大取次を知っている方がいたとしても、ルーマニアの取次を知っている方は多くはないでしょう。いかがでしょうか。

また、iPhone とか Android の書店アプリの情報も載せています。書店の中にカフェがあるもの（併設カフェ）や、その書店の店頭在庫が調べられるかといった情報も掲載しています。コンセプト 2 を言い換えると、「海外旅行で書店選びに困らない」本です。例えばブラジルには、建物の構成が全て書架という書店があります。書店チェーンであっても特徴のある書店を掲載することによって、読者の便宜を図りました。

コンセプト 3「現地調達ガイド」としては、日本で店頭在庫の有無を調べてから直接、書店に買いに行かれる方がいらっしゃると思います。同様のことを、例えばパリでも出来るように配慮しました。「Place des Libraires」というフランス全土の書店店頭在庫が調べられるサイトがあります。「村上春樹」（Haruki Murakami）と入れて検索しますと、『1Q84』が上位にヒットします。「パリ」などの県で絞り込めば、「この『1Q84』の第 3 巻目は、一覧表の緑色の印がある本屋に在庫がある」ことになります。ですので、海外旅行に行った場合、ルーブル美術館からノートルダム大聖堂に行く途中の在庫書店でこの本を買うというような芸当が可能になります。

筆者は執筆段階で国立図書館蔵書目録と総合目録を中心に 500 目録以上を見ました。国立図書館には、Aleph など、皆さんがよく知っているメーカーの、よくある有名な図書館システムが採用されていました。大半の国立図書館の蔵書目録は「意外に地味」と言っては失礼ですが目を見張るようなものはありませんでした。しかし例外もあり、日本、韓国、中国、台湾といったアジアの国々、イギリスやドイツといった国々の国立図書館の目録には Ex Libris 社の Primo という高額なシステムが採用されており、本当にお金を掛けられる国とあまりお金を掛けられない国の二極化現象がみられました。また、有名大学や複数図書館からなる総合目録については、こちらは基幹 OPAC 以外に Metalib、その他を採用している例が多く見られました。やはり、こちらにも規模・熱意・資金による二極化が見られました。

思い返すと、単純にすごいと思ったのが「カーリル」さんです。6,000 館の図書館の蔵書を検索できるというのは驚異でした。ほかに感心したのは（OPAC ではありませんが）、ISBNlib という価格比較サイトです。価格比較だけじゃなくて、無料電子書籍（試読含む）へリンクさせている、という意外性が印象に残りました。

さてほとんどの目録が自前で作る基本データベースに外部情報を付加、統合、案内、アウトリンク（外部リンク）する機能を取り入れるなどして、拡充を図っていました。ただ、先述したように 500 以上のオンライン目録を閲覧したのですが、筆者の頭にはあまり残りませんでした。何故、あまり記憶に残らなかったかを考えてみると、どうも「手作り感」が欠如していると感じたのがその理由です。

「手作り感」というと、素人っぽさを思い浮かべられるかもしれませんが、素人っぽさではなく、「一手間を掛け、価値を高めること」、と解釈してください。例えば、最近、明治大学図書館さんが、授業名から資料検索を出来るようにしました。これが「一手間」です。一手間を掛けることで、蔵書検索の価値を高める工夫、何か「手作り感」が出てくるのではないかと思います。先程、「規模・熱意・資金による 2 極化」という問題を指摘しました。図書館システムそして蔵書検索改善にお金を掛けられる図書館は、どんどんお金を掛けるし、あまりお金の掛けられないところはカスタマイズもしないで、システムを素のまま（パッケージのまま）使っておられる。第 2 部では、システムを素のまま使っておられる図書館を対象に、パッケージに少しプラス・アルファする（手を加える、工夫する）ことで、蔵書検索（OPAC）の価値を高める話をしていこうと思います。

それでは第 2 部「蔵書検索への外部情報の利用私案と実際の適用例」に続きます…。

第 2 部と第 3 部については、内容を整理・拡張し、2012 年 11 月 20 日（火）、第 14 回図書館総合展（パシフィコ横浜）の日外アソシエーツ主催のセミナー「中小図書館のための OPAC と電子情報資源の利用」（仮題）でお話するつもりです。乞うご期待。

(2012 年 8 月 6 日　録音テープ起こし：日外アソシエーツ)